

アトピー性皮膚炎の変遷と未来

アトピー性皮膚炎 (atopic dermatitis: AD) を知らない日本人がいるのかと言いたくなるように、現在ではありふれた皮膚疾患であり、同じアレルギー仲間の喘息や花粉症とともにすっかり大衆病として定着した。ところが、歴史的に見てこれ程までに波乱万丈な皮膚疾患は見たことも聞いたこともない。古代ローマの初代皇帝アウグストゥス、秀でた統率力と不屈の精神力の持ち主で、彼の死後もその栄誉は神格化された。そんな彼が長年悩まされていた疾患は AD である。紀元前の時代から難治性の疾患として、患者数は決して多くはなかったものの歴史上に足跡を残しながら、自らの出番を静かに待っていた。昭和 50 年当時の教書において、AD は乳幼児期に発症し思春期までに軽快する小児の代表的な疾患と記載されている。ところが、気密性の高いコンクリート住宅の普及に伴いハウスダストやダニといった環境抗原が増え、スギやヒノキ花粉などの植物抗原の大量飛散も加わり、その患者数は昭和 50 年以降うなぎ登り、特に成人例の増加が顕著であった。激しいかゆみや全身の湿疹に伴い不登校、休職、精神的な不安定により家庭内暴力、ひきこもり、離婚など大きな社会問題を引き起こした。原因回避のための過度な食事制限も乳児期ばかりか小児期を対象にして話題になった。マスコミはこの疾患に注目して特別番組を組み、数多くの皮膚科医や小児科医を檜舞台に押し上げた。その一方で、ステロイド外用薬のバッシングを連呼して、悪徳な民間療法やアトピービジネスが横行するに至り、エビデンスのない治療法のために皮膚症状が大幅に悪化して、入院を要するような重症患者を世の中に氾濫させた。

1999 年から厚生労働省研究班や日本皮膚科学会による AD 治療ガイドラインが作成され、スタンダードな治療法が普及し、電車の中や道行く人の赤ら顔や手や前腕に慢性化した湿疹病変をみる機会が大幅に減った。治療に関する混迷期の終焉である。しかしながら、ステロイド外用薬に不安を抱き、頑なに標準治療を受け入れない、特殊な治療法を求めて彷徨い続ける患者さんは後を絶たない。こんな

歴史を持った皮膚病は過去にあったのだろうか。作用機序の異なる新しい免疫抑制外用薬タクロリムスの登場により、ステロイド至上主義は終わりを告げ、副作用問題は軽減し治療の幅が広がった。免疫抑制内服薬シクロスポリンが AD にも追加承認され、重症例の治療薬に加わった。治療指針が作成されており、遵守して血液検査などを定期的に実施すれば安全に使用有効率は 6 割を超える。大橋病院皮膚科では、最重症例を短時間で大幅に改善する治療法として入院療法を展開している。驚くべき新事実として、重症例は下垂体-副腎機能が低下している。この現象は一過性で 1 週間の入院で皮膚症状の改善とともに速やかに正常に戻る。入院療法で使用したステロイド外用薬の安全性を検証した。しかし、長く閉ざされた闘病生活はときに心に大きな苦悩を生じ、日々のストレスから搔破行動を抑制することができず、心のケアも忘れてはならない。

重症な乾癬患者は、AD と同様に毎日の日課としての外用治療が不可欠である。これを怠ると皮膚症状は慢性化してときに AD と同様に難治性の紅皮症状態に移行する。2010 年から皮膚科的治療の根底を崩すような、画期的な生物学製剤が重症乾癬の治療薬として登場した。薬剤により異なるものの、2 週間、6 週間や 8 週間ごとの注射で高い有用性が得られ、日々の外用療法が無用になり大幅な QOL の向上に繋がる。そんな夢のような薬剤が AD になかったが、最近になってその有効性を検証する治験が始まる。AD は単一な要因で生じるわけではなく、乾癬に比較して明らかに多数の原因や悪化因子が関与している。年齢や季節そして環境因子やストレスも要因になる。本当にアレルギーの源流をしっかり抑えることができるのか治験参加を楽しみにしている。2030 年には AD を制圧できるとの予想もある。今回の薬剤がその救世主になりうるのか、作用点の異なる治療薬が登場するのか、猛威を振るった文明病を容易にコントロールする時代はもうすぐ来ると期待している。

(皮膚科学講座 (大橋) 教授: 向井秀樹)